

# 女・子どももの「江戸」

本田和子

## ◆ はじめに

このところ、「江戸」が脚光を浴びている。「江戸」を主題する論稿の量産とそれへの注目、そして「江戸」をめぐるイベントやシンポジウムの瀬発……。私どもの視界に、必ずしもバラ色とは見えなくなった未来に代って、過去が浮かび上ってきたのだろうか。「近代以前」と貶められ、薄闇の中に沈んでいた前世紀が、新しい照

明に包まれる……。しかし、現在の江戸ブームを、喪失への哀悼、過去を懐しむ郷愁とのみ位置づけるなら、それは不当の誇りを免れ得ないだろう。

「江戸」をふり返る視線は、近代化の下に否定されたかに見えるあれこれを把え返す意志に支えられてはいるが、かといって、それらは単なる伝統の復権とは異なるし、まして、失なわれたものへの挽歌などとも無縁である。あえて言うならそれは面白さの「発見」、流行の概念を借りるなら、現代を「異化する」知的ゲームとでも

位置づけられるだろうか。

このことは、私どもが「子ども」を見つめ返し、その言動に言及するありようと、どこかしら重なり合っている。私ども大人が、「子ども」について、とりわけその「面白さ」について語るとき、しばしばそれは、童心讚美と貶められ、大人たちの感傷と侮蔑されたりもする。

子どもは「子どもでいたい」などと思わないのだし、社会化の未熟さに基く稚拙な言動を、讚美されたり、憧れられたりするいわれはないのだ、と……。しかし、「子ども発見」の面白さが、そうした部外者の批判とはどこかしら「ずれている」と感じるのは、誰よりも、子どもと密着して生きている保育者であり、研究者ではないだろうか。とにかく、彼らの言動に刺戟され挑発されて、驚いたり、笑ったりしていることは、何故だかわからないが、「よいこと」なのだし、「元気が出ること」なのだ。「子ども」について、面白いことが次々に発見出来るから、この暗い時代をいいきいきと生きていくことが出来る。

---

すなわち、私ども大人が、子どもに刺戟され挑発されるということは、異質なものとして「子ども」を発見し、私どもとは異なる彼らの世界と接触することに他ならない。それは、私どもの日常性の中に束の間に生じた裂け目であり、習慣化し、そのゆえに自動化した日常生活が、その裂け目から裏返されて見慣れぬ世界が顔をのぞかせる。そのとき、私どもは、慣れ親しみ、古びてきたこの日常をも、新しく生き直す余地があることに気がされるだろう。異質なものと共存することの意味がここにあり、「子ども」をも「異質なもの」と捉えることの意義がここにある。「子ども」に驚歎し、その魅力に酔うことは、単なる感傷や郷愁とは同一に見なし難い。そして、いま、「江戸」をふり返り、「江戸」を面白がるありようも、「子ども」をめぐるこうしたありようと、どこかしらよく似ている。「江戸」という異質な時代を身近におくことで、より明きらかに見えてくるのは「現代」なのだし、「江戸」との共存によって、より柔軟に、よりいいきいきと、世界を把え返すことが出来るのは、私

ども「現代人」なのだから。

結果として、「江戸」から何を見出すかは人それぞれと言うべきだろうか。たとえば、あるものにとって、それはまさしく「近代の誕生」と見える。西欧的移入近代化のその以前に、日本的に熟成された「近代」であったというのである。そして、他のものには、それは「反近代」の鮮やかなしるしに彩られ、明治的近代が陰蔽した豊饒さに満ちた世界としてたち現われる。従って、それら混沌のすべては、貧困化した現代のアンチテーゼとして、その沸騰ぶりを誇示するのだ。

このこともまた、「子ども」研究を徹底しよう。彼らの特性を、人間にとって「普遍的」と見るか、あるいは、大人文化に対する異文化、つまりアンチテーゼとして記号化するかは、見るものの立場と、その人の位置する文化的文脈によって異なっている。もっとも、この両者は、必ずしも相互に無縁の孤立した知見ではない。仮りに「子どものもの」が人間性の普遍であるとして、それを「内なる異文化」、すなわち自身を異化する地点

と位置づけて生きるのが、「大人の日常」というものだろう。因みに、「子ども」は、その逆を生きる存在ということになる。

さて、前提はこのくらいにしよう。私は、ここで、「江戸」の面白さをあれこれと語ってみようかと思っているのだが、『幼児の教育』誌とは無縁の遊びと誤解されることを恐れて、どうやら長すぎる前口上を述べすぎてしまったようだ。いずれにせよ、「江戸」は面白いし、奥が深い。色々なものが、ぎっしりとつまっている。

#### ◆情報化される「生活」

##### ——女・子どもの登場——

「江戸」という時代は、人々の生活を「情報」と化したのが、それを促したのは、「江戸」という名の都市の出現であった。都市江戸の人口の男女比は、元禄・享保の頃に漸く女性が三五パーセントに達したという。それまでは、極端に女性が少なく、男性だけのより集まりだった

ということになる。つまり、この都市は、定着性を欠いた流動人口によってになわれていたのである。主君の参勤交替に従ってきた浪人ものや旅芸人たちなど、この町は、一時的な滞在者と行くあてのない漂泊者のたまり場だったのだ。

農村共同体や古い町では、人々は、ことごとく自分の暮し方を意識する必要がなかった。それは、おのずから、風が吹き、太陽が昇るような自然さで営まれるものであり、大昔から変らなく見える、日々の習慣のくり返しであった。そして、突発事に対処するには、それなりの共同体のきまりがある。冠婚葬祭や災害事の相互扶助……。一人々々が、頭を悩ませる必要はなかった。たとえば、その典型例の一つが、京都の町の捨子対策であろう。もし町内に子どもが捨てられていたら、それは町内の責任で育てていくというのだ。地域住民の自治組織の確かさを、見事に物語る例とされている。

これに対して、江戸は、いかにも不安定な町であった。家主が店子の世話をするという形は、一時的な居住

者たちに対して、とりあえずのまとまりを作り出すための窮余の策であったろうが、それは地域共同体が成立せず、たえず流動する江戸の特性の証であった。昨日までいた人々が、今日は姿を消し、また新しい住人で長屋の一部は占められる……。しかも、女性の絶対数が乏しいということであれば、時としてそれらは、「暮し」と呼ぶのものはばかられるほどの、男世帯の仮りの宿である。江戸前半期は、史上例を見ないほどの人口急増期であったという。急増する人口の、男だけが流出して江戸に集まってくる……。こんな状態で、増殖を始めたのが、江戸という都市の文化であった。

さて、流動人口から形成された不安定都市江戸が、それでも女をも招き寄せて、その比率がほぼ三割に達したのが、先に述べたように元祿以降であった。この頃から、「育児書」や「女性書」など、女性向けの書物が、出版市場を賑わし始める。そして、恐らく、そのきっかけを作ったのは、「日常生活」が「情報」としての意味を持つという、人々の意識に生じた変貌であったろう。

女性数が増加したとは、結婚して、男と女が世帯を構成、細々とながらも夫婦単位の日々の営みが始まるということにつながる。しかも、結び付く男女は、かつてのように、必ずしも同郷の、同じ土壌で育ったものたちとは限らない。両者ともに同じ信仰と習俗を身につけて、すべてを自明のこととして暮しを経過させる地域共同体のそれと異なり、双方が無意識的に選択する生活の前提が、随所でくいちがい、お互いを戸惑わせる。神仏のもてなしから煮付けや汁ものの味まで、日常些事があちこちで綻びを見せて、九尺二間の裏長屋の中にまで、対立がしのびこむ。

となれば、いや応なく、人々の意識の上に、「生活」なるものが浮上してくる。あえて意識する余地もなく、自然に流れていた日常の些事が、みつめられる対象と化し、話題とされる位置を獲得するのだ。たとえば「多くの人の口に合う味つけのしかた」、「食品の保存のしかた」、あるいは「妊娠時の心得」や「子どもがひきつけたときの応対」など……。それらが、紙の大量生産や印

刷術の革新などという、出版技術の向上と結び付き、「出版百科」「育児百科」的な書物の登場を促すのは、当然の経緯であった。

かつて、文字は公の記録に奉仕し、上流階級の教養に資するものであった。書物は、漢学や古典の伝達という形で、一部知識人の占有である。それに比して、文字や書物が日常性にかかわり始めた江戸中期は、注目に値する変革期である。何故なら、書物文化が庶民と手を結び、とりわけ、女・子どもに手を差し延べたのだから。結果として、彼らを標的とし、彼らを素材とした書物文化は、女・子どもを文化の表層に浮上させ、蔽いかくされていたあれこれを白昼の光に曝し出したのだった。

もちろん、識字率が徐々に上昇しつつあったとはいえ、書物を手にして、そこから生活の知識を吸収する女性たちがそれほど多かったとは言いがたい。裏長屋のおかみさんたちが、書物と首っ引きで炊事や子育てに従事したとは、いくら何でもナンセンスすぎる推理であろう。彼らの知識は、口から口へ、それこそ井戸端会議式な触

れ合いの中で伝えられ、受け入れられていったに相違ない。

しかし、こうして、「暮し向きのちえ」が、口伝に拡がっていくとは、それが「情報」としての意味を与えられたということであろう。生活書の出現は、これらの女性たちを讀者とはしなくとも、こうした心性と無縁とは考え難い。上州出身の彼にも、房州女の彼女にも、受け入れ可能な一般化された生活のしかたは、寄り合い世帯に支えられた新興都市江戸では、不可欠のちえとして求められたに相違ないのだから。

◆ 凝視される細部

生活の情報とは、いうまでもなく、一般論として提供される原理・原則ではなくて、具体的に身体レベルで営まれる行為の伝達である。従って、それは、具体的なものごとの観察とその言説化という新たな課題への挑戦でもあった。たとえば、「澤庵漬」の漬け方を説明した

次の文書など、それを物語る興味深い例と言えよう。

「大根だいこんの性良しよらよきを撰あび、土つちを洗あひ、日当あたり能よき処よへ、乾か場ばをしつらひ十四五日乃至二十日編あみて日に乾かし、夜分やぶん霜しもげぬ様やうに手当てあてして干かして、小皺こぢの出来できたる程ほどを見て漬つけるなり。桶おけは四斗樽よどの酒さけの明立あひだは殊更ことさらよし。又古ふるき四斗樽よどを使つかはゞ、米こめなどを入いれて、底そこの間あひだに挟はさまりあるは甚はなだ悪あし、米粒こめつぶあれば酸味あまみを生しょうする物ものなり、心付こころくべき事ことなり。(以下略)」「大根だいこんのよいものを選えび、土つちを洗あつて、日当あたりのよい所に乾場かを設たけ、十四、五日から二十日ぐらい、編あんで吊たして日に乾かかす。夜は霜しもに当あてないように注意ちゆいする。干かし上あつて小皺こぢがよつてきたら漬つけ込こむ。桶おけは、酒さけの四斗樽よどの新あたらしいのがよい。古いものは、米こめの入いれものなどに使つかつた場合、米粒こめつぶが木きと木きの間まにはさまさままつていたりすると、その米粒こめつぶから酸味あまみがでて味あじが悪わるくなるから注意ちゆいしなければならぬ。(『漬物早指南』より)。

大根だいこんを洗あつて土つちを落おすという、当あたり前ますぎぎるくらゐ当あたり前まの手順てしゆんまで文章化ぶんじょうかし、桶おけは新あたらしいのがよいという一

般的原則を述べた後でも、古い桶に関する注意を「米粒云々……」と極めて具体的につけ加えずにはいない。生活の情報化が促したのは、ものごとに対するこうした態度であり、そのゆえの即物的な細部への凝視だったと言えそうである。そして、「即物的に細部を凝視する」心のかたちは、「子どもの特性の抽出」と、恐らくは無縁ではないだろう。人々のまなざしが、一人々々の具体的な身体の特徴やその動きに向けられるとき、「子ども」と呼ばれる小さい人たちは、その特性をあらわにするに相違ないからである。子どもたちの特性に即した扱い方の詳細が、書物の形で表現されるとき、従来の教訓書とは異なる「育児書」が、市場に姿を現わすことになる。

たとえば、「当座の苦勞をいたわりて、子のねがいのままに育てぬるを、姑息ニセキ（一時しのぎ）の愛といい、姑息の愛をば、舐犢シトク（子牛をなめ育てる）の愛として、牛の子を育つるにたとえたり。」（中江藤樹『翁問答』より）という形の抽象論にまして、次のような具体的な表現が生み出されるのだ。

「地下じげがかりの風とは、十歳のところより、仮にも善き人に付き会い、善き事を聞く事を嫌い、下さまの小者部屋に駈け込み、小草履取りをともない、かくれんぼうに鬼むさし、はさみ象戯、むめおりは、浄瑠璃本を引きひろげ、句切りもあしく読みなして、『長田が鞆鎌田兵衛』とある所を『おさ誰たれ鞆か又兵衛』と読み覚え、（以下略）」（香月牛山『小児必用養育草』より）（地下がかりの風といわれる悪い習慣とは、十才くらいから、良友良師とのつき合いを嫌って、使用人たちの部屋に入りびたり、かくれんぼうや鬼むさしその他の遊びに興じ、また、浄瑠璃本などを広げて、間違った読み方で読み下し、たとえば「長田という者の鞆である鎌田兵衛」と書かれているのに、読みの句切りがいい加減なので「おさは誰の鞆か又兵衛」などと誤ったまま覚えてしまう。

因みに「地下がかりの風」とは、姑息の愛の果てに子どもの身につく、悪習慣のことを指している。つまり、溺愛の愚を戒めるにしても、子どもが示しがちな具体的な行為に即して、例を挙げつつ語っていくという語り口が

採用されているということだ。生活の情報化と連動した「細部への凝視」が、子どもを発見し、子育てを言説化して、書物文化の軌道にのせていく経緯がここにあった。

一八世紀以降、わが国でも博物学への興味が増大し、大名から町人に至るまで、多量の博物学者が輩出している。植物や動物を観察し分類し、図類を作る営み。その精緻を極めた描写は、後の世の発見者をして、「ほんものの標本ではないかと、思わず目を近づけた」と驚嘆させるほどであった。顕微鏡のない時代に、ここまで仔細に細部を凝視する。博物学を繁栄させたこの視線は、「子ども」や「子育て」に注がれるそれらと無縁ではあるまい。「子ども」を突出させる時代とは、単に「子ども」のみを目立たせる時代ではなく、具体や細部と直接的にかかわり合おうとする、即物的な心性に支えられていると言いうことが出来よう。

(お茶の水女子大学)

